

**令和 6 年度千葉県水産振興審議会 栽培漁業・資源管理部会  
議事概要**

- 1 日 時 令和 7 年 3 月 12 日（水）午前 10 時から午前 11 時 30 分まで
- 2 場 所 千葉県教育会館 304 会議室
- 3 出席委員 委員 10 名中 8 名出席  
柴田委員、立岡委員、土屋委員、石井春人委員、松本委員、  
鈴木委員、高梨委員、石井つや子委員
- 4 傍 聴 人 3 名
- 5 概 要

（１）「水産動物の種苗の生産及び放流並びに水産動物の育成に関する基本計画」における令和 6 年度実績について【報告事項】

（２）「水産動物の種苗の生産及び放流並びに水産動物の育成に関する基本計画」における令和 7 年度計画について【協議事項】

議題（１）及び（２）について関連事項であることから、一括して資料 1、資料 1－1、資料 1－2、資料 1－3、資料 2 のとおり漁業資源課から説明があり、質疑応答の後に議題（２）について原案通り承認された。

**【質疑応答等】**

**① アワビの令和 7 年度放流計画（案）について（資料 1－2）**

委員：令和 7 年度のアワビの放流計画が 80 万個＋可能な限りの増産を目指すとしているが、令和 6 年度中に放流されない小さい種苗は令和 7 年度の実績となるのか、令和 6 年度の 60 万個に追加されるのか。

県：令和 6 年度ではなく令和 7 年度の実績となる。小さい種苗は令和 7 年度の実績に組み入れられるが、80 万個＋可能な限り増産を目指すという令和 7 年度の計画数量は変えていない。

水産振興公社：令和 6 年度の採卵、生産は順調であったが、夏の高水温の影響で成長に遅れが生じたため、残った 10～20 万個の種苗は令和 7 年度に繰り越すこととなり、令和 6 年度は 60 万 2 千個が実績となる。

委員：その場合、令和 7 年度は新たに 80 万個以上の生産できるということか。

水産振興公社：目標はあくまでも 80 万個だが、実績はプラスアルファを期待して生産していきたい。

委員：令和 7 年度もまた小さい貝が出る可能性もあるのか。

水産振興公社：夏場の高水温が続くと成長が遅れてしまい、小さい貝が次年度にずれ込む可能性はある。

② アワビ種苗生産の高水温対策について（資料１－２）

委員：アワビ種苗生産の高水温対策はどうするのか。

県：今年度は今までに無い沿岸の高水温が続き、２か月の成長の遅れが生じた。可能な限りストレスを掛けない飼育管理や海水の供給が停止しないよう施設を維持し、換水率を上げるよう公社と連携して取り組む必要があると考えている。

委員：以前、もっと深いところから取水した方が冷たくて良いという話があったが、そういうことは何かしないのか。

県：深いところの海水は水温が低いが莫大なコストが掛かるため、既存の取水を使っただけの計画となっている。

委員：施設整備にあたって、もう少し工夫してほしい。

議長：こういった意見があったので、予算の制約などあるかと思うが、工夫をしながら取り組んでいただければと思う。

県：いただいた意見について、工事の設計の中で出来る範囲で検討しつつ、飼育管理等については、現場と情報共有しながら対応していきたい。

③ 工事中的アワビ種苗の放流について（資料１－３）

委員：アワビ種苗生産施設についても工事で４－５年は生産が休止となるが、その間には他県の種苗の放流を検討してはどうか。

県：他県や県内産の種苗の放流も考えていきたい。

④ ヒラメの体色異常魚の出現防止について（資料２ １ページ）

委員：飼育環境について、トラフグでは超低照度と低照度環境下で噛み合い防止効果があったが、低照度環境下でのヒラメの体色異常魚出現防止効果は無かったとのこと。トラフグで効果のあった２つの照度を用いてヒラメ試験の再検証を行うことはあるのか。

県：トラフグで効果のあった照度条件ではなくヒラメの全国の事例との比較を行う。

委員：ヒラメは令和７年度が生産休止だが、検証はどのように行うのか。

県：水槽試験ではなく、各県の取組と本県の取組の比較検討を行う。

⑤ 内湾と内房の境について（資料２ ４ページ）

委員：内湾と内房の境はどこか。

県：地理的には富津岬を境に北を内湾、南は洲崎までを内房としている。

県：トラフグにおいては、大佐和漁協より北を内湾、天羽漁協より南を内房として取り扱っている。

⑥ ヒラメの放流方法について（資料 2 4 ページ）

委員：ヒラメの放流について、館山の栈橋から放流するようになってからはヒラメがすぐ潜るようになったが、過去に船上から放流していた時は潜らずに鳥に食べられていたため意味が無いのでは思った。

県：ご指摘のとおり、以前は沖合に船上から放流していたが、一度に放流出来る量が限られることや活力の低下が問題だった。そのため、岸壁からの直接放流に変えたことで、放流までに時間が短縮され、種苗の活力が保たれたと考えている。

（3）本県主要魚種の資源評価・管理について【報告事項】

参考資料 2－1、2－2により漁業資源課から説明があった。

【質疑応答等】

① 資源評価の方法について

委員：水産庁の方針により漁獲量で資源状況が分かるように見せているため、漁獲量が減れば資源も減っているように見えてしまう。漁船隻数などを入れて示せば誤解がでないのではないか。

県：資源評価について、今後も漁業者の意見を取り入れて検討していきたい。

（4）漁場整備に関する事業実施状況について【報告事項】

参考資料 3により、漁業資源課から説明があった。

（5）磯焼け対策に関する取組状況について【報告事項】

参考資料 4により、漁業資源課から説明があった。

【質疑応答等】

① 磯焼けの状況について（参考資料 4）

委員：台風前であったが業者が調査で船形地先に潜った際にカジメなどの海藻が生えていたのを確認した。

② 磯焼けの原因について（参考資料 4 35 ページ）

県：磯焼けの原因については、高水温なのか、高水温で食害が増えたのかを正確に説明してほしい。

県：冬場の高水温が長期化することで植食性魚類の活動期間が長くなったことが影響している。

県：過去は千葉県沿岸でアイゴは再生産していなかったが、現在、館山湾では再生産が確認されており、冬場は高水温により活動期間が

長期化している。また、アイゴの生息域も東京湾の富津岬を越えているなど拡大している。

③ 磯焼け対策について（参考資料 4 36 ページ）

委員：目標に向けた課題の人的資源の不足について、一般企業との連携などもあるが、漁業者の数が減っており、刺し網漁業者がいないところでは駆除が進まず、限界がある中で、感情的な部分で難しい面があると思うが、他地区の協力というのも取組に入れてもいいのではないか。

県：他地区の漁業者が入ることへの抵抗については、地域差があるが、研修会等を通じて取組を進めていきたい。

（６）その他

漁業資源課から千葉県ノリ養殖業生産振興計画改訂について検討状況の報告があった。